

機関番号：32615

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19710221

研究課題名（和文）現代における危機の表象と怪物生成のメカニズムについての研究

研究課題名（英文）Research on Representation of Crisis in Contemporary Society and the Mechanism of Monster Creation

研究代表者

生駒 夏美 (IKOMA NATSUMI)

国際基督教大学・教養学部・上級准教授

研究者番号：60365525

研究成果の概要（和文）：メディアや文学における危機の表象において、ジェンダーの要素が国家共同体の概念と深く結びつき、犯罪者のイメージが性的逸脱や規範的ジェンダー逸脱と関連していることが明らかになった。逸脱者を犯罪者として描き出し、罰することにより、他者として社会から排除し罰する機能を持つ言説は、同時にその社会の脆弱な規範や国民アイデンティティを保持しようとする意図に支えられている。

研究成果の概要（英文）：The research reveals, through the analyses of both media and literary representation of modern crises, gender and the concept of nation-state, of national identity are inseparably bound. The images of criminals are often connected to transgressed gender norms. The crime narrative describes the accused as the transgressor and thus punishes them. It has a function to cut off the transgressor from the rest of the society. It also has a function to retain the already fragile norms of the society and the ever more fragile concept of national identity intact.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：思想、学際的研究、境界、怪物、他者、現代文学理論、劇場型犯罪、メディア研究、テロリズム

1. 研究開始当初の背景

9/11を始めとして、世界的規模でのテロ事件が頻発する中、報道や文学におけるテロ、およびテロリストの描かれ方に違和感を持ったのがきっかけとなり、現代においてメディア狂乱を引き起こす事件にはどのような共通項があるのか、その表象にはどのような

特徴があるのか、考察を行なう必要性が感じられた。

中でも、国境を越えたテロリズムと、国の関係、また国とジェンダーの関係を文学的分析から明らかにすることが重要であった。

2. 研究の目的

本研究は、いかなる存在が怪物として嫌悪され、社会から排除されてきたかを、文学・歴史両面から探るとともに、現代の様々な危機的モーメントにおいてはどうか、その危機がどのように表象されるかの分析を通じて、怪物生成の仕組みを検討するものである。

フーコーやクリステヴァの研究に明らかのように、恐怖を何者かに投影し、その人間を排除することによって社会は恐怖に対処してきた。そのために、社会を「乱す」とされた人種的、性的、また他種のマイノリティがしばしば排除の対象とされたのである。本研究では、特に現代社会における他者的存在とは誰であるのかを探り、そのような「他者」との共生のために、何が求められるかを探る。研究の性格上、ジェンダーの視点が不可欠となる。

既存の文学領域を超え、社会における「語り」を総合的に捉えることを目指した。また、対象として日本社会、欧米社会を扱ったが、これはインターネット時代の到来を受け、もはや国境という概念が形骸化する中で、現代における恐怖の構造を照射するには、国別分析では不足するとの考えからである。

明確なイデオロギーが欠如し、複雑で混沌とした現代社会の分析として、これまでの漁期分断的研究手法では到達不可能であったあらたな知の領域を目指した。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、危機がどのように言説化されているかを見ることとした。具体的には、現代における危機的モーメントとしていくつか抽出し、その小説化、映像化したものや、マスコミの言説を分析する。文学とジャーナリズムを境界で分断せずに分析することもこの研究の特色であるが、その理由としては、怪物生成および他者排除のメカニズムは、社会において何層にも重なった言説においてなされるのであり、そこでは文学、あるいはメディアといった境界線は無意味だからである。

現代的な危機のモーメントとして選んだのは、9/11、オウム真理教事件、和歌山カレー事件、秋田連続児童殺害事件、ジョンベネ・ラムジー事件である。これらの事件の中には米国で発生したものも含まれるが、それらは日本でも大きく報道され話題となったものである。米国社会の特殊性を反映する事件でありながら、やはり日本社会にも大きな影響を与えた事件として、研究対象とした。

また、これらの分析から、特に日米の現代社会の性質に深く関与しており、特に日本の近代国家アイデンティティの形成に大きな影響を与えた歴史的な出来事として、第二次世界大戦、および明治維新の言説を扱った。

4. 研究成果

1) オウム真理教事件

事件を扱ったマスコミ報道と文学作品を集め、そこで信者や教祖がどのように造形されているかと分析した。その結果、この事件がややもすると劇画的に捉えられ、さらに教祖を矮小化する嗤いが語り導入されることによって、事件のインパクトが薄められていることが浮かび上がった。オウム真理教事件を日本社会全体の深刻な問題としてとらえることが拒否され、ひとりの異常者の起こした荒唐無稽な犯罪として排除されているのである。これは裏を返せば、オウム事件が内包する家族崩壊や身体コントロールといったものが、現代日本人の精神にとっていかに大きな問題であったかを知らせるものでもある。村上春樹や大江健三郎による文学昇華への試みがあるが、特に前者の場合、この問題を自己のものとして引き受けるといよりは、異質なものとして扱う傾向が強かったことが残念であった。

2) 和歌山カレー事件、秋田児童殺害事件、神戸児童連続殺害事件

劇場型社会において、映像とパフォーマンスが加害者とされるものの「怪物化」に果たした役割を考察した。特にこれらの事件はテレビ報道の形で人々に伝えられ、注目を集めた。これらの事件においても、オウム真理教事件の場合と同様、被疑者個人の異常性に言説が集中し、規範に逸脱した人物として排除されていった。

オウム真理教事件もメディアを利用し、またメディアがその性格作りに大いに影響した事件であったが、この項で扱う事件はさらに現代社会という「劇場化社会」が、被疑者への憎悪を際限なく増幅させる仕組みを明らかにするものであった。これらの事件は、被害者数をとってみても規模としては小さなものであったにも関わらず、ジェンダー規範を逸脱している被疑者、あるいは子供のイノセンスという幻想を逸脱している被疑者が、ことさらに「怪物化」されていった。小さな共同体での事件が、メディア狂騒を通じて、「テロ」のような全国的なものとして報じられていった過程は興味深い。

このパートでは、現代がインターネットによって「劇場化」が高度に進展した社会であることと、犯罪／報道がそれに対応して変化していることを分析し、インターネットというメディアが現代に生きる人間にとって、どのような自我への危機をもたらすかを検証した。特に、インターネットというメディアは、一個人を情報の消費者のみならず、生産者として参加させるものであるのだが、それに伴う責任については、議論が進んでいない現状の問題点が挙げられる。

「切り裂きジャック」や「ソディアック事件」といった劇場型犯罪に見られる特殊性と、それらが引き起こす社会の反応の特殊性の相関関係については、さらに推考を要する。

また、研究期間内にはできなかったが、ここにジョンベネ・ラムジー事件の分析も加える予定である。金髪碧眼のジョンベネが無垢の犠牲者としてセンセーショナルに捉えられたことと、米国社会における子供（特に白人の）のイノセンスという言説構築について、考察し、一連の日本での事件と比較検証したい。

3) 9/11 アメリカ同時多発テロ事件

9/11の言説においては、米国が代表する西側キリスト教国と東側イスラム諸国という二項対立が特に目立ち、後者側の言説はほとんど表象されず、沈黙を付されていた。米国側の言説では特に、キリスト教的価値観である家族や信念といった「人間性」が強調され、それによって沈黙させられたテロリスト側の「非人間性」が浮かび上がる仕組みとなっていた。

また特に政府の言説には家父長的言説が多く見られ、多種多様な米国市民を「アメリカニズム」のもとにまとめようとする帝国主義的思惑が見え隠れした。それらは、米国内にも存在しているアラブ系アメリカ人、またイスラム教徒のアメリカ人を無化することによって、「敵」を外側に排除し、それらを攻撃することによって米国を強化しているのだった。

2)で扱った事件と同じく「劇場型」事件である9/11は、映像の力を利用したテロでもあるわけだが、空高くそびえ立つファルスのような世界貿易センタービルの崩壊が、イメージとしての父権の崩壊を強く印象づけたことは、その後の米国が喚起する父権的言説と無関係ではありえない。

国家のアイデンティティとジェンダー（特

に父権）が強く結びついている事を示す事案であり、小説にも父と息子や父と家族のテーマが散見された。ここで、家族のイデオロギーが喚起され、父権的国家言説とともに、アメリカの正当性を支える言説となった。

日本は、キリスト教国ではないが、米国の父権にそのまま同調する形で米国のアフガニスタン侵攻を指示した。ここに、明治維新以来の日本のアメリカニズムが発露している。9/11に関する日本独自の視点が、文学としてあまりあらわれていないことも、この事態の深刻さを示すものである。

4) 明治維新

3)で扱ったのは、国家の危機において発動する父権的言説であった。これを日本社会において検証するには、まず明治維新が適当である。

そこで、明治期の文学にみられる女学生の表象を分析し、女学生に注がれる父権的なまなざしを検証した。当初、近代的女性の象徴としてもはやされた女学生であるが、明治後半にもなると「ふしだら」な退廃の象徴として、文学上で罰せられる存在となっていく。代表的な作品としては田山花袋の『蒲団』がそれである。これらの作品の中で、近代人として自我を確立しようとする男性が、女学生を罰することによって自己の特権を打ち立てて行く過程が描かれており、近代日本国家において家父長制が強まって行く仕組みが明らかになっている。

近代の日本人が、女性を含まない概念として成立しているものであり、アンチテーゼとして、自然としての女性、あるいは風景として女性が成立させられている。この国民観は、現代においても決して効力を失ってはいないことは、2)で扱った事件の被疑者たちのような逸脱した女性が、言説の上で罰せられるのを見ても明らかである。

また、国民全体が国家、そして一部の権力層によって統制される状態も近代において作り上げられている。こうした「国民アイデンティティ」は、第二次世界大戦後に権力者が米国に変化しても継続していったと考えられ、9/11の際の日本の行動はそれを証明するものである。

5) 第二次世界大戦

第二次世界大戦後、敗戦がどのように日本国家のアイデンティティに影響されたかを分析する。敵であったアメリカへの憧れやへ

つらいが描かれるとともに（太宰治など）、その戦後日本社会を象徴したのはパンパンの表象である（安部公房など）。日本と日本人を「裏切った」哀しい女のイメージは、日本社会が自らの姿を彼女達に重ねる事なく、他者である女性に投影し、その女性を貶めることで自己回復を図っているようにも思われた。

原爆や空爆の被害者のイメージがさかんに語られたことも、敗戦の事実や加害の事実から目を逸らし、あたかも自然災害からの復興を目指すかのように、国民が一致団結することを促している。

この項はさらなる研究が必要であったが、体調不良により期間内に遂行することができなかった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 生駒夏美、「田山花袋『蒲団』に見る日本の近代化とジェンダー」、*Gender and Sexuality*、Vol.7、2012、1-25、査読無。
- ② 生駒夏美、「劇場型社会の犯罪物語とジェンダー ——和歌山カレー事件を中心に——」、*Japan Studies: The Frontier* 日本研究のフロンティア、7-22、2010年、査読無。
- ③ 生駒夏美、「悪者づくり ——オウム真理教事件を巡る言説について」、*Asian Cultural Studies*、Vol.35、241-264、2009年、査読有。

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 生駒夏美、「アンジェラ・カーターの欲望理論形成における日本文学／文化の影響、谷崎と野坂を中心に」、日本比較文学会、東京支部例会、2011年11月17日、日本大学
- ② 生駒夏美、“End of Literature?: Probing the Meaning of Literature in the Age of Terrorism”、Harvard-Yenching Institute Literary Symposium、2010年5月1日、ハーバード大学（米国）
- ③ 生駒夏美、“On Modern Witches: Crime Narrative and Monstrosity”（現代の魔女：犯罪ナラティブと怪物性）、ハーバ

ード・イェンチン研究所トークシリーズ、2009年12月4日、ハーバード大学（米国）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

生駒夏美（IKOMA NATSUMI）

国際基督教大学・教養学部・上級准教授
研究者番号：60365525